

仏リヨン、レジスタンスが残したもの



宮川 裕章

フランス東部リヨン郊外カリユールの広場。ソフト帽にコート姿の男の像が、静かにたたずむ。男の名はジャン・ムーラン。第二次世界大戦中、ドイツ軍に北部を占領されたフランスで、対独抵抗運動レジスタンスを率いた。ペタン元帥が対独協力政権を樹立する中、亡命先のロンドンから国民に抵抗を呼び掛けたのはドゴールだった。だが実際には抵抗運動は各地で自発的に起きた。ドイツ軍の目をかいくぐり、国内の抵抗組織を一つ一つ、つなぎ、ドゴールの下に結集させたのはムーランだった。ドイツ軍の作戦の妨害や破壊、情報収集など大戦中、6万5000人を超えるレジスタンスが活動し、約2万人が死亡している。

ムーランは、トラブルと呼ばれる複雑な抜け道が多いリヨン中心部に隠れ家を構えて活動した。そして1943年6月、カリユールの広場に隣接する医師宅での会合中、クラウス・バルビー率いるドイツ秘密警察に逮捕される。リヨ市内の施設で拷問を受け、ドイツへ移送される途中で死亡した。

戦後、凱旋^{がくせん}帰国したドゴールは、フランスを強国にしようと献身した。大統領への権力の集中や、米国に追従しない独自外交などは、ドゴールの遺産だ。だが大統領となったドゴールは68年、戦後の平和を享受してきた若者たちに疎まれ、学生運動の高まりを機に、翌年、政界を引退した。一方のムーランは、死して伝説となった。

レジスタンスがフランス社会に残したものは何か。一つには、国家としての誇りがある。戦後、ペタンの対独協力政権が、積極的に国内のユダヤ人を検挙し、強制収容所に送り込んだ事実が明らかになった。フランス人はドイツとペタン政権に抵抗したレジスタンスの記憶をたよりに、尊厳を保ってきた。もう一つはムーランが体現した不屈の精神だ。ムーランは拷問で顔が原形をとどめなくなっても、組織の秘密を守った。

ムーラン逮捕から80年。マクロン大統領は今年5月、ムーランらが拘束されたリヨンの収容所跡を訪れ、「バルビーらはフランスの抵抗の叫びを消そうとしたが、失敗に終わった」と述べ、追悼した。

観光客でにぎわうリヨンには、悲壮な歴史と現代フランス社会の原点が隠されている。